「不登校の子どもの心の理解」

横浜市東部地域療育センター
高橋　雄一

文部科学省の「令和 4 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、小中学生の不登校児童・生徒は 10 年連続で増加し、約 30 万人となっています。文部科学省は、令和 5 年に「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」(COCOLO プラン）と「不登校・いじめ緊急対策パッケージ」を取りまとめました。その中で不登校に関して、「不登校の児童生徒全ての学びの場の確保」「心の小さな SOS の早期発見」「情報発信の強化」を進めるとしています。ただしこれまでも平成 4 年に現在の「不登校」の定義がなされて以来、スクールカウンセラーの配置や教育支援センターの設置など、さまざまな不登校対策が立案、実施されていますが、明らかな改善はみられていません。これは個々の子どもの不登校の背景が十分に理解されず、適切な支援に繋がっていないという印象があります。

一般に子どもは大人と比較して言葉での感情表現が未熟であるため、精神的ストレスが身体の痛みなどの身体症状や、粗暴行為や自傷などの行動上の問題として現れやすい特徴があります。不登校の子どもはこのような症状を伴うことが多く、「心の SOS」を表していると捉えられます。しかし保護者や学校関係者が不登校の子どもを前にすると、焦って早急な変化を求め、学校への登校や不登校支援機関の利用を強く促すことがしばしばみられます。一方子どもは大人のこのような関わりに負担感や不信感を強め、抵抗を示します。

不登校に至る背景は一人ひとり異なり、学校の要因ばかりではなく、子ども自身の要因や家庭の要因などが重なり合っていることが多いです。支援を考える際には、子どもが直面しているストレス要因に加え、子どもの性格傾向や発達特性、家族や友人、学校関係者との関係性、生活環境など多面的に状況を把握する必要があります。その上で「子どもが苦悩しているのは何か」を理解し、子ども自身の意思を尊重し、安心して過ごせる環境を整えることが望まれます。すぐに登校に繋がらなくても、多くの子どもは徐々に自分の居場所を見つけて動き出します。

この考え方は不登校に限らず、他のさまざまな行動上の問題をもつ子どもへの支援にも共通します。子どもの行動の背景を十分に理解しないまま、子どもの問題を除去しようと画一的な対応をしても解決しません。子どもの周りの大人は子どもの心の SOS に寄り添い、支え続ける関わりを意識していただきと思います。